

論文題名：山崎豊子『大地の子』研究

—作品成立、中国現代文学との関わり、及び主人公像を中心に—

関西大学大学院 文学研究科 唐 楚輝

山崎豊子は1924年、大阪市船場で生まれた。1941年、旧制相愛高等女学校を卒業し、1944年、旧制京都女子専門学校を卒業した。その後、毎日新聞社に入社し、学芸副部長の井上靖に師事し、井上に新聞記者としての働き方を教わった。また、山崎は勤務の傍ら、小説を創作していた。1957年、処女作『暖簾』を発表し、翌年、『花のれん』（1958年）で直木賞を受賞した。それをきっかけに、毎日新聞社から退社し、専業作家となった。その後、山崎は『ぼんち』（1959年）、『女の勲章』（1961年）、『女系家族』（1963年）などの大阪を舞台にした小説ばかりでなく、『白い巨塔』（1969年）、『華麗なる一族』（1973年）、『沈まぬ太陽』（1999年）などの社会問題を題材とした作品を数多く発表していた。

本論では、山崎の文藝春秋読者賞の受賞作『大地の子』（1991年）を取り上げて論じる。具体的に言えば、作品の成立経緯、中国現代文学との関わり、そして主人公の人間像を検討する。ここでは、本論を3部に分け、以下のような構成とした。

序論

第1部 山崎豊子『大地の子』の成立経緯

第1章 山崎豊子『大地の子』の成立—作者の取材記録と文献資料を手掛かりとして—

第2章 山崎豊子『大地の子』の構想に関する考察—「製鉄所建設」シーンの作り方をめぐって—

第3章 山崎豊子『大地の子』の構想に関する考察—「中国残留孤児」当事者の評価を手掛かりにして—

小結

第2部 中国現代文学との関わりについて

第1章 山崎豊子『大地の子』の構想に関する考察—中国人作家・従維熙との関連を手掛かりにして—

第2章 山崎豊子『大地の子』論—黄書海や江月梅の人物像をめぐって—

第3章 山崎豊子『大地の子』論—典拠『天雲山伝奇』との比較—

小結

第3部 山崎豊子『大地の子』論—陸一心の人物像をめぐって—

結論

参考文献

初出一覧

（論文概要）

各部の概要を説明する。

第1部は作品の成立経緯をめぐって、3章に分けて論じている。

第1章では、山崎豊子『大地の子』の成立を取り上げる。従来の研究では、山崎は『大

地の子』を書こうと決めたきっかけを、作品の後日談『『大地の子』と私』に基づき、概説した。だが、山崎が中国で、どのような人物に取材し、どこで調査したのかなどを検討していない。また、山崎がどのように参考文献の要素を作品に取り込んだのかを詳細に分析したものはない。そこで、本章は山崎豊子の取材活動記録、参考文献を精査し、『大地の子』がどのように成立したのかを検討した。さらに、『大地の子』を創作するために、作家が参考にした文献を調べ、そのうちの40冊の文献が深く関わっていることを指摘し、そして、一時取り沙汰された『卡子』 剽窃事件に注目し、参考文献である『卡子』をより詳細に取り上げた。さらに、その内容は『大地の子』にどこまで取り入れられ、『大地の子』の作品としての独自性を検討した。

第2章では、山崎豊子『大地の子』の「製鉄所建設」シーンを取り上げる。先行論はそのシーンにおける登場人物、舞台設定のモデルに関して論じている。ただ作品は、①中国上層部の政権抗争、②製鉄所建設工事現場のトラブル及び③主人公・陸一心がそのトラブルに巻き込まれたことの3点のストーリー展開がある。その点には先行論は触れていない。よって、作者はこの3つの展開を、どのように設定したのかを検討する。まずは先行研究に論じられなかった「製鉄所建設」シーンの作り方を分析する。実在の宝山製鉄所建設に関する山崎が利用した参考文献、及び資料を調べ、作者が如何にして、作中人物の鄧平化と夏国鋒を造形したのか、及び二人をめぐる政争を描いたのかを分析した。その結果、山崎は鄧小平、華国鋒に関する文献を参考にはしたが、そのままではなく、創作を加え、鄧平化や、夏国鋒の人物像を描いたことを明らかにした。また、作者が想像力を駆使し、現実にはなかった「製鉄所建設をめぐる中国上層部の政争」のプロットを着想したことも分かった。さらに、山崎は宝山製鉄所を見学した際、目撃した両国の従業員の間のトラブルを題材とし、トラブルを解決するために、主人公が日本人実父と交渉することを強いられる場面を設定したことも判明した。

第3章では、『大地の子』の作品構想の真実性を取り上げる。「中国残留孤児」当事者としての劉奔や大久保明男は、『大地の子』を読んだ後、この小説が現実離れしていると批判した。劉は作品における「長春戦役」シーンの設定が現実と異なると指摘し、大久保は主人公の中国人養親の姿や結末の設定が、大多数の中国残留孤児の現実と食い違っていると主張する。本章は、二人の指摘した問題点を手掛かりとして、作者がいかにして、「長春戦役」シーン、日本人孤児や中国人養親の人間像、結末を設定したのかを検討した。その結果、山崎が他の孤児への取材、および参考文献で得た素材を用いて、「長春戦役」のプロットを作ったことが判明した。また、劉奔、張永海などの中国人として生きると決めた戦争孤児に取材し、彼らのアイデンティティ意識を主人公・陸一心に取り入れたと考えられる。

第2部は「中国現代文学との関わり」をテーマにし、3章に分けて論じている。

第1章では、中国人作家・従維熙との関連を手掛かりにして、山崎がどのように『大地の子』の「文革」シーンを着想したのかを分析する。中国で取材した際、山崎は二度従維熙にインタビューした。彼女は従の「労働改造」体験や彼の作品から要素を摂取し、『大地の子』を執筆した。従来の研究はその点に注目したことがない。それ故に、本章では、山崎の従維熙に対する取材を考察し、従の「労働改造」体験が、『大地の子』で、いかに生かされたのかを検討した。一方、従のアドバイスを聞き入れ、山崎が中国の労働改造所・監獄を訪れ、犯人に取材し、また犯人脱獄の実情をも把握し、その実情を素材として、『大地の子』に書き込んだことも論じた。

第2章は主人公・陸一心を取り巻く登場人物の黄書海と江月梅を取り上げる。この二人は主人公の運命に大きな影響を与えた。先行論はこの二人に注目したことがない。従って、本章はこの二人の造形を検討する。検討の結果、中国で取材した際、作者は日本から帰国

した華僑にインタビューし、その人をモデルとして、黄書海を塑造したことが分かった。一方、山崎は張賢亮の作品『土牢情話』を参考にし、その内容を加筆し、自作において、陸一心と江月梅とのやり取りを着想したと考えられる。

第3章は『大地の子』と典拠『天雲山伝奇』との関連を取り上げる。先行研究は、その両作品を比較して、深く検討したことがない。二作を照合し、『大地の子』における登場人物の関係には、『天雲山伝奇』と共通する部分があることを確認した。『天雲山伝奇』では、女主人公・宋薇、元恋人の羅群及び夫の呉遥という三角関係をめぐって、物語が展開していく。同じように、『大地の子』では、趙丹青、元恋人の陸一心、夫の馮長幸とのやり取りが詳細に描かれる。さらに、両作品における結末設定、女性人物造形の相違点に注目し、『大地の子』の独自性を確認した。加えて、山崎が『天雲山伝奇』を参考にした理由を論じた。その理由は、『天雲山伝奇』における「右派分子」が迫害されたプロットに啓発されたことであった。

第3部は『大地の子』主人公・陸一心の人間像を取り上げる。先行論には、主人公の造形、設定を論じたものがあるとはいえ、主人公が中国人となろうとする行動、及びその理由を論じたものはない。また、作者がどのような実在の人物をモデルとして、陸一心を造形したのかを論究したものもない。従って、まず、作者の取材活動を検証し、どのような人を陸一心のモデルとしたのかを確認した。続いて、小説の内容を考察し、陸一心が中国と日本の狭間で悩み、最終的には中国の主流社会に溶け込むために、中国人となろうとすることが分かった。最後、陸一心は、日本人実父からの永住帰国の要請を断り、自分が「大地の子」と宣言する場面に注目し、「大地の子」の意味合いを論じた。